

明治日本の産業革命遺産

～「産業国家」日本の原点 鹿児島～



ごまめこうぐち
金山が繁栄していたころの面影を残す胡麻目坑口跡



当時の胡麻目坑(尚古集成館蔵)



第8代鉱業館長
西郷菊次郎
(さつま町教育委員会蔵)

永野金山

【住 所】 薩摩郡さつま町永野金山
【アクセス】 九州自動車道・横川ICから車で約20分
(県道50号を宮之城方向へ)
※金山公民館に駐車場・総合案内板あり



世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産」の構成資産となっている3つの資産(旧集成館・関吉の疎水溝・寺山炭窯跡)以外にも、県内には島津斉彬の始めた集成館事業にまつわる遺産が多数広がっています。

日本で先駆けて近代化を進め、数多くの事業に取り組んだ薩摩藩ですが、日本の近代化をリードすることができた理由の一つに、藩の直轄事業として進められた金の採掘がありました。

1640年に発見された永野金山は、さつま町永野地区と霧島市横川町山ヶ野地区にまたがる金山で、山ヶ野金山とも呼ばれます。

幕末、集成館事業の電信実験を応用し、火薬を用いた採掘法を行うなど、日本の金山の中でも最初期に近代化が図られ、1908年

第5回 薩摩の近代化を支えた金山資源 ～永野金山(さつま町)～

に作業所や坑内に電気が引かれると、産金量は大幅に増加しました。

1912年には、西郷菊次郎(西郷隆盛の長男)が鉱業館(金山の本事務所)の8代目の館長として就任し、金山の近代化に貢献しつつ、夜学校を開設し人材育成に尽力したことも知られています。

1953年、300年以上続いた歴史に幕を下ろし閉山となりましたが、金山が繁栄していたころの面影を残す数多くの遺産が今でも残っています。

関連情報

産業遺産を巡るモデルコース

「かごしま産業遺産の道」ホームページでは、県内に広がる集成館事業にまつわる遺産を楽しみながら周遊していただくためのモデルコースを掲載しています。

アクセスはこちらから

